



世の「毒」を 若者に 食らった こそ可能性はある

藤原新也

(写真家・作家)

●ふじわら・しんや

1944年福岡県生まれ。東京藝術大学油画科を中退し、20代から30代にかけてアジア全域を放浪。72年に処女作『印度放浪』を発表する。78年、『逍遙游記』で第3回木村伊兵衛賞受賞。82年、『全東洋街道』で第23回毎日芸術賞受賞。著書に、『東京漂流』『乳の海』『千年少女』『なにも願わない手を合わせる』『日本浄土』『メメント・モリ』『書行無常』など多数。

関野吉晴

(探検家・医師、武蔵野美術大学教授)

●せきの・よしはる

1949年東京都生まれ。一橋大学法学部、横浜市立大学医学部卒業。1993年から10年をかけ、アフリカに誕生した人類が南米最南端まで辿り着いた旅路「グレートジャーニー」を踏破した。2004年から「新グレートジャーニー 日本列島にやってきた人々」を始め、2011年6月に「海のグレートジャーニー」を終えて日本に到達した。



国立科学博物館（東京・上野）でいよいよ特別展「グレートジャーニー 人類の旅」（六月九日まで）が始まった。開催に際して、関野吉晴氏が「人類の未来」を賢人たちと語り合ったシリーズのうち、藤原新也氏との示唆にあふれる対談をお届けする。

自然のなかのモラル

関野 藤原さんは、二十代のころからインドやチベットをはじめ、アジア全域を旅してきましたよね。私も一九七〇年代からアマゾンの先住民マチゲンガやヤノマミの人たちのもとに通い続けてきました。いま振り返ると、自然を破壊せずに、自然に寄り添うように生活する彼らの生き方に惹かれたんだと感じています。私たちが育ったのは、日本という国が経済成長を最優先させて、自然環境を破壊していった時代でした。道路とともに電線や電話線、ガス管、水道管などが国中に張り巡らされ、その後の日本人は、その「管」や「線」がなければ生活できない状態になっています。いや、日本人だけじゃなくて、世界中の先進国は同じような状況です。

ただ、あらためて考えてみると、すべての線や管を取り除かれてしまっても、アマゾンの先住民を見ればわかるように、人間は死にはしませんよね。しかし、自然を完全に失ってしまったら、人間は死に絶えてしまう。それなのに、いまだに日本は自然破壊と引き替えるの経済成長を目指しています。そんな危機的な現状を見るにつけ、私は、いまの日本人に本当に必要なのは、マチゲンガやヤノマミのように自然に寄り添って生きる人たちの知恵なんじゃないか、そう思えてならないんです。今日はそうした現状の話から始めて、自然と人間の関係、人類社会の将来像などについて藤原さんと語り合えればと思っています。

藤原 なんだか壮大なテーマになりそうですね。たしかに僕も、いまの日本人は自然から離れてしまっていると感じます。われわれが子どものころはもつと自然が近かった。自然のなかにある動かしがたいモラルや構造を自分の身体のなかに写して、生きる基準というか、社会や人間の規範を作ってきた。

人間を含めた動物の脳には、欲求が満たされたときに活性化する報酬系と呼ばれる神経系があります。アマゾンの先住民もそうですが、森や川に行けば、魚や